

MA・SO・BO通信

TAKE FREE

2022 9>10

札幌に息づく 伝統芸能

八王子車人形西川古柳座 五代目 西川古柳

やまびこ座で三人遣いの指導を始めて20数年の歳月が流れました。今でもやまびこ座の劇場に飾ってある「傾城恋飛脚」の梅川と忠兵衛。この二体の人形を飾っておくだけでは忍びない。何んとか舞台に上げさせたい。と始まったのが三人遣い講習会です。やまびこ座の初代館長の加藤さんが市民の手でこの人形を遣えば未来に繋がるのではないかと。言うことでわたくしにお声掛け下さりお手伝いすることになったわけです。私の暮らす東京の八王子に残る伝統芝居である八王子車人形は基本、一人遣いの人形芝居です。もともとは江戸に残る三人遣いでした。幕末の時代に江戸の三人遣いが衰退し、一人遣いの車人形が誕生しました。わたくしは20代の時に勉強の為に東京の国立劇場文楽研修生で三人遣いを2年間学ばせて頂きました。そのことが縁で札幌で人形の指導をすることになったのです。初めはどう教えて良いのか右往左往する事ばかりでしたが先ずは基本と思い簡単な型の動きを教えました。札幌は伝統があまり無かったのが良かったのか三人遣いの人形が古めかしい人形の芝居ではなく新しい芝居ととらえて頂けたのが良かったのか、基本に忠実で何回かの練習で形になってきました。お稽古を始めて1年目で発表会が行えるようになったのは私としては奇跡に近いものがありました。その頃は伝統芝居を札幌に根づかせようなどとは思っていませんでした。毎年の発表公演が3年、4年と続く中、新しい座を結成することになり「さっぽろ人形浄瑠璃あしり座」が誕生したのです。

今現在も講習会は「三番叟」「八百屋のお七」と「傾城恋飛脚新ノ口村の段」で毎年公演を行っておりますが、あしり座は他の演目を公演することで演技の幅を広げてきました。毎年新しい古典に挑戦し続けております。この思いが今でも続いているのが素晴らしいことです。その後1999年「ユースクラス」の誕生である。このクラスは中学1年生から高校3年生のクラスで、若い世代に古典の人形浄瑠璃を公演しながら楽しんでもらいたいと思い、始めたのです。ここでも中高生はこの人形を古めかしいとは思わず新しい形の人形劇と捉えたのでしょう。何の抵抗もなくお稽古を始めたのは衝撃だったと今でも感じております。その後2004年「こどものための伝統芸能体験シリーズ」(※現在のふれアート)が始まる。これは小学生から参加して三人遣いの人形を遣います。ここでもユースクラスと同じ現象が生まれました。このふれアートは人形だけではなく、義太夫や鳴り物、舞台体験と幅広い事を学ぶことのできる場です。これも札幌子ども劇場やまびこ座と言う拠点が有ればこそその企画です。このように毎年、古典を学

べる場が有るのは珍しいですし全国に広めたらもっと古典が身近なものになるのではないのでしょうか。ふれアートに参加している子供たちは数回のお稽古でお芝居の振りを覚えてしまいます。なんとすごい集中力かと毎年感心して指導しております。やはり子どもは天才!!と思うのはこの時ですね。ふれアートで学び、その後ユースクラス、講習会そしてあしり座へと進んで行ける道筋です。今では習っていた子供たちが教える側にもなっています。人に教えることは自分で学ばせて頂く場でもあることを気づかせてくれます。車人形の次世代育成にも大いに学ぶべき点があります。現在、車人形が一番重要視しているのは学校公演。現在は保育園、小・中学校公演を中心に大学でも公演を行っております。保育園は年少さんから古典の演目の鑑賞・体験をして頂いております。年少さん(3歳児)から年長さんまで3年間同じ演目を見ていただくことにより楽しい体験の記憶となることを目指しております。年少さんの時には勿論、人形はまだ怖いという印象です。年中さんになると内容も記憶しており反応は様々ですが楽しんでる様子が見えがえします。年長さんですと殆ど内容も理解し覚えているようで楽しい体験として記憶されるようです。もう8年間ほど行っていますが小学校や中学校で公演に伺いますと「保育園で観た」と気軽に声を掛けてくれる子がいるのは実に嬉しいことです。

伝統人形芝居は浄瑠璃が基本です、現代社会において浄瑠璃は親しみの薄れたものです。言葉も芝居も理解することが大人でもなかなか難しいことです。私もどうしたら楽しんでもらえるかを常に模索しております。近年、我々は何とかここを乗り越えるために公演前のレクチャーや芝居の見どころ、時代背景などをお話してから公演を行っております。聞き逃して欲しくないセリフの場面もお伝えします。そうすることで現代との共通点を見出しお客様に楽しんで頂けるようにしております。

今後の課題ですが、あしり座のみんなに考えてほしいことは、伝統を継承しながらどのように未来に繋げて伝えていくかです。次の若い世代に古典の人形芝居の魅力や素晴らしさ伝えて行きながらも伝統人形芝居の新たな一歩を踏み出し、今までにない世界を創り上げて行かなくてはなりません。あしり座は常に前を向き新作にも挑んでおります。その意欲や行動力は掛け替えのない力だと感じております。共にしっかり前を向き頑張って歩いて行きましょう。

八王子車人形西川古柳座 五代目

西川 古柳 (にしかわ こりゅう)

八王子に160年以上続く伝統人形芝居『八王子車人形』の五代目家元。(国選択民俗無形文化財、東京都無形文化財指定)
幼少より祖父(三代目)父(四代目)に指導を受け、23歳で文楽研修生として三人遣いの操作も学ぶ。1987(昭和62)年よりスウェーデン国立人形劇団、スウェーデン人形劇学校で車人形の指導にもあたっている。1976年から海外公演を始め、現在までに40か国以上で公演。1994(平成6)年からやまびこ座で開講している人形浄瑠璃講習会の講師を担当。



連載 「中島児童会館で育った私の児童劇は 8」

「やまびこ座」プロデュース公演『うぬぼれうさぎ』

鈴木 喜三夫

私が演出を降りた後、「共育舎」を中心に10回『森は生きている』は続けられたが、以前の評価には至らなかった。残念である。3回目で「やまびこ座」もその企画からはずれ、1992年12月には単独で児童劇の新しいプロデュース公演を実現させることになる。「やまびこ座」で児童劇作品を何とか毎年、創りたいという岩崎義純の強い意図は『森は生きている』2回の評価によって確かなものになったに違いない。

その演出を依頼された私は、旧ソ連のミハルコフの児童劇『うぬぼれうさぎ』を選択。この作品は私が2回演出(58年「こりす」、63年「劇団さっぽろ」)して、鉄砲を手に入れた兎が森の中で自



分が一番強いとうぬぼれ、兄弟・家族を危険に陥れるという風刺の利いた児童劇である。とくにこの芝居は私にとっては大変に懐かしい作品(この前の連載「MA・SO・BO通信」第8号参照)だ。

今回の『うぬぼれうさぎ』(舞台写真)は、より明るく楽しい児童劇に仕上げたつもりである。主人公のうぬぼれを市内で活躍の新人にして、猟師・兄弟夫婦・狐と狼を「〜芝居の仲間」で固め、子兎たちは「やまびこ座」で活躍の子どもたちにした。その子どもの一人は現在、清田区「里塚児童会館」で働く池内潤樹である。彼に会うたびにあの頃の芝居づくりをはっきりと思い出す。

翌年12月も同じ作品を上演。キャストはうぬぼれだけを代え、ほかの役は代えなかった。それをきっかけにして「やまびこ座」の児童劇プロデュース公演は今も続く。94年から5年くらいは「北海道演劇集団札幌ブロック」が担当し、飯田信之・秋元博行・多海本泰男らの演出で『竜の子太郎』『ぼくは王様』などを創る。その後、紅千鶴、

北川徹の演出作品があり、2003年からは西脇秀之が「回帰線」のメンバーを中心に起用し「うそつきのした」「その手の物語」など数年続けた。

08年からは西脇演出で、一般市民から募集した「東区市民劇団育成事業」の発表の場として「東区市民劇団オニオン座」と銘打ち、現在まで継続している。(詳細「あつまれ みんなの笑顔」<「やまびこ座」30周年のあゆみ>参照)

私はこの児童劇プロデュース公演がこれからも発展していくことを願い、やがてこどもの劇場「やまびこ座」の専属の児童劇団や人形劇団が生まれ、毎日のように子どもたちのための「児童劇」が上演される日が来ることを大いに期待したい。(敬称略、つづく)

鈴木 喜三夫 (すずき きみお)



1931年・札幌生まれ。札幌北高から東京・玉川学園大学へ入学。56年中退してテレビ作家で活動後、札幌へ帰り59年専門劇団「さっぽろ」創設。86年フリー演出家、2009年「座・れら」を結成、現在に至る。94年北海道文化奨励賞、07年北海道文化賞受賞。04年「北海道演劇1945-2000」(北海道新聞社)上梓。



本の案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
荒井さん編 ③

『こども六法』

編集:日本ペンクラブ「子どもの本」委員会
著:山崎 聡一郎 出版社:弘文堂

日本の六法のもとになったのはナポレオンの五法典で、それに「憲法」を加えたといわれています。さらに行政法が加わって七法になるはずでしたが、なぜか六でまとまりました。司法関係者や企業で法務を担当する人、そして厄介ごとに巻き込まれた人(あるいは厄介ごとを起こしてしまった人)以外、なかなか普段の生活で法律に接することはないのですが、この本であらためて「法ってなに?」に思いを巡らせてみてください。この本は「いじめをなくしたい」という思いで立ち上がったクラウドファンディング(オンライン寄付)でつくられました。ですから、法律は人を罰するためにあるのではなく、守るためにある、ということをすんなりと理解できる内容になっています。



『若冲 ぞうと出会った少年』

著:黒田 志保子 出版社:国土社

伊藤若冲といえば、いまでもそ熱狂的な人気を誇る江戸期の画家ですが、半世紀前まではほとんど顧みられることはありませんでした。2006年に東京国立博物館で開かれた展覧会が英国の美術専門紙に「1日の平均入場者数が同年における世界最多」と評されてから注目されはじめ、生誕300年の2016年に東京都美術館で開催された「若冲展」では1か月余りで44万6千人、1日あたり15,000人弱と驚異的な入場者数となり、最高待ち時間は320分を記録しました。色彩に富んで、アクが強く、ある意味、異端である彼の作品が、マンガや現代アートに親しむ現代人にマッチしていることが人気の理由のひとつといわれていますが、この本にそのほかの秘密が隠されているかもしれません。



『おにぎりの文化史 おにぎりはじめて物語』

監修:横浜市歴史博物館 出版社:河出書房新社

食欲がなくてもおにぎりなら、なんとか入りそう、というときってありますよね。中身の具についても「なんといってもシャケだよ」「いやいや、梅干こそ王道」「やっぱりツナマヨですよ」など、こだわりはひとそれぞれ。形も丸に三角、俵型。海苔の巻き方もいろいろあります。考えてみれば、おにぎりって不思議な食べ物ですよね。では、いったいつから、私たち日本人はおにぎりを食べてきたのでしょうか。江戸時代? それとも奈良時代? この疑問を徹底的に解明したのがこの本です。膨大な参考文献を紐解き、おにぎりと思わしき出土品を調べ、おにぎりの起源に迫ります。読み通せば、ますます、おにぎりがおいしく感じることも間違いなし。ぜひ自分流で握ってみてください。



『伝統を継承しながらどのように未来に繋げていくか』どの分野にも言える永遠のテーマと感じます。古柳師匠でなければ、この札幌にやまびこ座に、根付くことはなかったでしょう。出逢って本当に奇跡。人が大切にしているものが残っていくことが伝統。ありきたりですが、子どもたちにもいろんなこと、いろんな人と出会って奇跡を起こしてほしいな。まさに恩返しに繰り返して!おかえし!(柳本)

お問い合わせ お申し込み
札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南線北「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからもご覧いただけます。
https://koguyama.jp/masobo/index.html

